

(そのとき、)ヨハネは二人の弟子と一緒にいた。そして、歩いておられるイエスを見つめて、「見よ、神の小羊だ」と言った。二人の弟子はそれを聞いて、イエスに従った。イエスは振り返り、彼らに従って来るのを見て、「何を求めているのか」と言われた。彼らが、「ラビ、――『先生』という意味、――どこに泊まっておられるのですか」と言うと、イエスは、「来なさい。そうすれば分かる」と言われた。そこで、彼らについて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見た。そしてその日は、イエスのもとに泊まった。午後四時ごろのことである。ヨハネの言葉を聞いて、イエスに従った二人のうちの一人は、シモン・ペトロの兄弟アンデレであった。彼は、まず自分の兄弟シモンに会って、「わたしたちはメシア、――『油を注がれた者』という意味、――に出会った」と言った。そして、シモンをイエスのところに連れて行った。イエスは彼を見つめて、「あなたはヨハネの子シモンであるが、ケファ、――『岩』という意味、――と呼ぶことにする」と言われた。

―ヨハネ 1 章―

「見よ、神の子羊だ。」

神に出会った人は、人が変わると言われます。

出会ったと思い込んでいる人も、人が変わります。しかし、両者に、命にかかわる決断を迫られるような「いざ」という時が来ると、違いがはっきりと出てくるともいわれます。

神に出会った人は、自分の命よりも他者を大切にしますが、出会ったと思い込んでいる人は、自分を大事にするものです。

人は、自分で自分を救うことが出来ないと実感させられる、八方ふさがりの苦境の中で、藁をもつかむ思いで神を仰ぐとき、ある人は、気が付いたら広い所に置かれて、自分を苦しめていた敵がいなくなっていたという体験をもらいます。

一度でもこの救いを体験しますと人は、神を支えに生きる人に変えられるのです。苦境の中で自分の力に頼る人、あるいは慰めを求める生き方に、この体験は無用なのです。「自分の力」「慰め」が悪いと言っているではありません。それらはもともとすべて神の恵みであって、神に感謝する心があれば、その人はこう祈る信仰の人でしょう。「神よ、この現実を感謝します。この現実のゆえにあなたを賛美します」と。

洗者ヨハネは、自分の使命を果たして、「見よ、神の子羊だ」と人々をイエスへと向かわせます。「神の現存」、「神との出会い」を探し求めている人は、神の招きでイエスに出会い、出会った人は、イエスの霊を受け、肉の囚われから解放されて「誘惑」と「恐れ」の多い世にあっても、神を支えに生きていく人になるのです。

洗者ヨハネは、自分の使命を果たして、「見よ、神の子羊だ」と人々をイエスへと向かわせます。「神の現存」、「神との出会い」を探し求めている人は、神の招きでイエスに出会い、出会った人は、イエスの霊を受け、肉の囚われから解放されて「誘惑」と「恐れ」の多い世にあっても、神を支えに生きていく人になるのです。

